【265】

| | |
|---|---|
| 氏　名（本籍） | 太幡直也（埼玉県） |
| 学位の種類 | 博　士（心理学） |
| 学位記番号 | 博甲第4728号 |
| 学位授与年月日 | 平成20年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 |
| 学位論文題目 | **懸念的被透視感が生じている状況における対人コミュニケーションの特徴** |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　査 | 筑波大学教授 | 博士（心理学） | 吉田富二雄 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 文学博士 | 松井　豊 |
| 副　査 | 筑波大学准教授 | 博士（心理学） | 綾部早穂 |
| 副　査 | 筑波大学准教授 | 博士（心理学） | 加藤克紀 |

## 論文の内容の要旨

本論文では，“他者と相互作用している状況において，自分で直接的に伝えていないのに，気づかれたくない事柄を相手に気づかれているかもしれないと感じる感覚”を懸念的被透視感と定義し，懸念的被透視感が生じている状況における対人コミュニケーションの特徴を検討することを目的とした。懸念的被透視感という概念を導入することにより，内面の被知覚の意識が生じる状況の特徴や，その意識が対人コミュニケーションにおいて果たす役割について明らかにできると考えられる。

本論文は，理論的概観，実証的研究，全体的総括の三部で構成された。以下にその概略を述べる。

第1部：理論的概観

第1章では，内面の被知覚の意識に関する先行研究が概観された。そして，内面の被知覚の意識が対人コミュニケーションの進行に与える影響について明らかにされていない点が未検討点として指摘された。第2章では，“懸念的被透視感”が提唱され，対人コミュニケーションの進行を検討する意義が論じられた。第3章，第4章では，懸念的被透視感が生じている対人コミュニケーションの特徴の検討のために，懸念的被透視感の強さ，懸念的被透視感による反応，反応が観察者に与える印象の三点を検討することが議論された。

第2部：実証的研究

第5章では，懸念的被透視感が生じる状況の特徴について検討された。そして，主な特徴として，①内面を気づかれたくない理由には自己利益的な理由と他者配慮的な理由があること，②相手の反応や自己の反応を手がかりとして懸念的被透視感が生じることが指摘された。

第6章では，懸念的被透視感の強さを規定する要因について検討された。その結果，懸念的被透視感を強める要因として，①自己の私的側面，公的側面に注意を向けること，②自己の内面を気づく相手の能力が高いと認知することが明らかにされた。

第7章では，懸念的被透視感による反応について検討された。懸念的被透視感に特徴的な反応として，沈黙や視線回避などの焦りを反映する非言語的反応，話題からの回避などが示された。また，懸念的被透視感が生じた際には，①認知的負荷があると，焦りを反映する非言語的反応の表出が促進され，発言の的確性が低くなること，②内面を気づかれたくない意識が高いと，話題からの回避が生じやすいこと，

③内面を気づかれたくない理由に対応した言語的方略が用いられやすいことが明らかとなった。併せて，懸念的被透視感を強く感じると，視線が回避されやすいことも示された。

第 8 章では，懸念的被透視感による反応に対する他者の印象について検討された。その結果，沈黙や視線回避といった非言語的反応によって，落ち着きがなく，発言内容が疑わしい印象を他者に与えることが示された。また，欺瞞性の高い言語的方略によって，言語内容が疑わしい印象を他者に与えることも示された。併せて，認知的負荷や内面を気づかれたくない理由が反応を媒介として，他者の印象に影響を与えていることも明らかとなった。

第 3 部：全体的総括

全体的総括では，懸念的被透視感の役割が，懸念的被透視感を感じる者の視点，対人コミュニケーションの二つの視点から整理された，懸念的被透視感を感じる者の視点では，懸念的被透視感は，対処反応だけでなく，焦りを反映した副次的反応の表出を促進し，加えて，認知的負荷，動機的要因の影響をより強める役割を果たすことが指摘された。また，対人コミュニケーションの視点では，懸念的被透視感は，懸念的被透視感による反応によって不自然な印象や発言内容が疑わしい印象を他者に与えるという，自己成就予言現象を生起させる形で対人コミュニケーションの進行に影響を与えることが指摘された。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

懸念的被透視感という概念を通して，懸念的被透視感が生じる対人コミュニケーションの特徴について検討した本論文の着眼点は独自なものであり，多くの調査や実験を積み重ねて検証した点は評価される。特に，懸念的被透視感の役割を，懸念的被透視感を感じる者の視点，対人コミュニケーションの視点の二つの視点から位置づけた点で，本論文は高く評価される。また，懸念的被透視感が生じている時点における，対人コミュニケーションを構成する個々のステップを検討するアプローチによって実証的検討を行った点に，本論文の工夫やオリジナリティが伺える。今後は，一連の対人コミュニケーションの観察的検討など，他のアプローチによる検討も望まれるが，内面の被知覚の意識を，懸念的被透視感という独自の概念を用いて詳細に検討を行った本論文の意義は大きいといえる。

よって，著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。